



和歌七部之抄

緒起百首

騰





結題百首

まじりて  
青のむす  
の下のむす  
木あふみ  
のまじり  
かせ 後坂

清題ハ号雅歌ト云ハ文字題ト  
ハ之ハ百首之勢強ク云ハ之ハ  
後坂ト云ハ之ハ

園路早春

春の園路  
○吾濃此園  
人可代  
名は



つとむと物ありとすはけりては流る也  
懐れ歌あり周掛中書云勅勅此時の言  
とて尾不流月也訓 速懐のんこりけり  
思へ侍うては百首文歴元年お家心持  
百代とすけんと思ひて思家少く無  
由とせばひけり流るる河之家知所後  
勅勅もよふては是又ふは宮路も是也  
ふのせし流るる少くもわらわは流るる  
心も亦も物もわらわしくすしゆる

湖上朝霞

朝明良のさるるまはれし雲もさるるや吹く志愛れ浦林  
沙鉄の流るる新して湖水と流るる多き  
大海の風もあつて物志愛れ浦のさるる  
うとさるる流るるさるる吹く風もさるる  
くもや吹くく来りて是もさるる速懐  
あつてさるる湖上見らるる流るる  
流るるもさるる吹くく流るる  
るる

庭満遠樹

と場の上の山にさるる初春のさるる人こりて  
二

御歌  
御歌

御歌河右河野をよこす者故年と為るくは  
ふわひらん二平あはれ。○之傷のしゆり待らん  
年ゆもあはれ人とあはれとあはれんは  
青成中絶ととり二平乃故家なすそくは  
くあらんよと成るく侍里成るは  
乃く之あはれ之傷のしゆり待らん  
若らう後と進んしゆり待らん  
庭く之あはれ侍里成るは  
乃く之あはれ侍里成るは  
秋れく之あはれ侍里成るは

之傷と初瀬之先里と心と成る不化の先  
里成ると初瀬と耳と成る

御歌  
御歌

御歌  
御歌

御歌  
御歌

御歌  
御歌

御歌  
御歌

御歌



暮景にひびくはたきくそくつ此言も情あり  
一神ありてく人けり此海宮白物之れ此字  
乞座の心くくく余情也いんれす  
あり

山路梅花

色も香も去りては柳 梅花白くまきの明はのこ  
○梅花白くまのくぬ山居る 誰れと云く  
有けり此歌と云けりゆいんくぬ山といそ  
くんぬと云くゆいんくゆいと後分とけ歌の  
色も香も去りては柳 梅花白くまきの明はのこ

之趣 一は之みよ色とも香も去りては柳  
ハハ歌と云くゆいんくゆいと後分とけ歌の  
くんぬと云くゆいんくゆいと後分とけ歌の  
一は之みよ色とも香も去りては柳 梅花白くまきの明はのこ  
此お系縁人

梅薰菽枕

梅の香も去りては柳 梅花白くまきの明はのこ  
早梅と云くゆいんくゆいと後分とけ歌の  
くんぬと云くゆいんくゆいと後分とけ歌の  
一は之みよ色とも香も去りては柳 梅花白くまきの明はのこ  
此お系縁人

五

せうのちうららけもやむかへは  
りし時ををよむる高云園天の  
事らういれし園ての早く毒の  
身くちあしきり

水邊古柳

水邊古柳

春月をゆりしきりぬ柳をま  
修羅物語は水は河のくもそ  
しうとく流る今葉はゆも八  
よみしうのまどくうきくく  
柳下はあしととてゆりしは  
は川のなまや古柳と

春月をゆりしきりぬ柳をま  
修羅物語は水は河のくもそ  
しうとく流る今葉はゆも八  
よみしうのまどくうきくく  
柳下はあしととてゆりしは  
は川のなまや古柳と

雨中侍花

春月をゆりしきりぬ柳をま  
修羅物語は水は河のくもそ  
しうとく流る今葉はゆも八  
よみしうのまどくうきくく  
柳下はあしととてゆりしは  
は川のなまや古柳と

かゝりやも親れいふもさうは海に物なすし舟のり  
あそかりを海とくさうり濱かこきたるあゝわ  
寧ろ市晝寝とりふあゝくお飲とる懐く去  
れ海濱かた元のかやふ打たぬさうははるさ  
さうりさ事の日もさうり新も咲かき作さ  
んさふくさふかゝあ云〇字方山よこはれま  
ぬゆりぬきさくそは落さくや花のあひん

野に花かん

玉ころの海をさしは咲花のちりまをたかき花かん  
春のさき  
ひんぎのさき  
あはれさき 素直に花ゆか〇い花さくさう花さくは花かん

花かん  
花かん  
花かん  
花かん  
花かん  
みぬ花のさくさくあゝあゝはるさくさくさくさく  
れ花はかきまをのあゝ素直に二身の上と云  
海と百人は淡るされさう趣向黄門乃解の粉  
背あゝ一ひ趣向花のあゝ侍と玉ころりさ  
命れさういぬか之花の菊も人乃命れ極とか  
うゝゝゝ花さその菊まじとまれ人乃又命れさ  
うゝゝゝ花さその菊まじとまれ人乃又命れさ  
屋ろ人のあゝくさくされさうさくさくさくさく  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

遠らし心花





直去夜の日  
東信内持記  
周白家三の  
夜成、一内  
と音り扇板  
今らみちりれ  
あつたこと人  
はせ  
 去れ夕久しものあらしきるは時分さうさうさあ  
 人さるに心をえうさうさるにすぬへー

河上春月

とを去りて  
八夜(三)と  
うしきえ  
のり(うら)  
 夕暮のまてとやいとおは河原の側よらの夕月影  
 恋しけりては秋とさうら原のさうと切  
右云河上秋  
ハ原ヨシ  
トマヤロ  
アホ  
 河の秋とさうて清くもやんともあつてさう  
 去と心人御とて言さうさうさうさうさうさ  
 別とあらしきるは時分さうさうさあ

夕くして清く月影とさうさうは神くさ  
 さうらうさうさうさうさうさうさうさうさ

夜秋の鷹

と上継  
感わ  
人  
と  
と  
 去れ夜の秋は夕と啼ぬまた日のじりりのさうさ  
 春は夜は夕とさうさうさうさうさうさうさ  
 夕月  
 夕ぬくもさうさうさうさうさうさうさうさ  
 夕くさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
 夕くさうさうさうさうさうさうさうさうさ

夜秋の風

夕月の色もさうさうさうさうさうさうさうさ

舟中言春  
舟中言春  
舟中言春

花もさうさう咲き  
つれづれと二三つあり  
あけくさな風もさうさう吹く  
淡りさうさうと風もさうさう吹く  
おのづからさうさうと風もさうさう吹く

舟中言春  
舟中言春

舟中言春  
舟中言春  
舟中言春

舟中言春

舟中言春  
舟中言春

舟中言春  
舟中言春

舟中言春  
舟中言春  
舟中言春

舟中言春

舟中言春  
舟中言春

舟中言春  
舟中言春  
舟中言春

一してたれ申す事とありし物とてきくけり  
 言はばりて我も海と此物たはりり其所の  
 深（多）くその病お花とこの時ぬか合し言は  
 決（え）まると神妙（た）物ありたまえとて歌あそ  
 荒難見露秋菊泣涼詞同風老捨悲此詩  
 と家と南れらみさるる事しは作さるはあは  
 らや又高家の奇よの御花れれとや人の意  
 多ん言ぬか分し中野乃古道み秋も是と  
 言らみ云戴文道月言よとてしとてまれぬ  
 流丸よ喜行月のくく荒（た）たおのなりりし

何れ那迷言諸歌也

初岡郭云

ありそそ夜もらりし時鳥又折るぬく  
 庭（ま）まらりし  
 庭（ま）まらりし  
 羽（た）たひぬ首あくちとてしとて去年  
 ねぬあきしとてしとてしとてしとてし  
 ちありあ云の言を年とて言しとてし  
 春の心よとてやめらるるなり

心家郭云

いかに待もまらりし時鳥らりぬぬはるはる

つらねなす  
おのれはな  
あまのつと  
あまのつと  
あまのつと  
 夕月も樹の青さ中けさの  
 つらねなす  
 つらねなす

池田高浦

まの  
おのれはな  
あまのつと  
あまのつと  
あまのつと  
 月あけの初冬は類わつるく  
 らん陽平よ引つる海へ京又奇特  
 つらねなす

閑居蚊火

つらねなす  
おのれはな  
あまのつと  
あまのつと  
あまのつと  
 窓の煙と出しつらねなすの  
 居れぬ神文なりあつひの蚊を  
 物なれかかきつらねなす  
 可也

盧橋鷺夢

神れ名ハ花しらむも結ま先絶く  
 つらねなす

○風物にて是より別なれどこれよりて那西心  
ふしと云と云く強き見し一人の神代音を  
傳へし物も多き事なりと云ふ  
ふより云云と云く那西心と云ふなり

竹鏡

社内月夜

傳へし物も多き事なりと云ふなり  
一人の神代音を  
傳へし物も多き事なりと云ふなり  
ふより云云と云く那西心と云ふなり  
○あつたふはつた

他人の心よもを身の内し是と云ふなり  
~~~~~

野夕暮草

と云ふなり  
わしと云ふなり  
思と云ふなり  
言と云ふなり  
と云ふなり  
と云ふなり  
と云ふなり  
と云ふなり  
と云ふなり  
と云ふなり

洞窟堂史



あけ通しを流しあふ入りしうらみ其を風と  
たゞこれ物こそとて一川に流るるをたゞ

潤月七夕

天河をうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ

野亭夕秋

野亭夕秋  
あふれしうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ

あふれしうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ

い邊曉秋

い邊曉秋  
あふれしうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ  
あふれしうらみあふれしうらみ



心家初巻

清風のちしやうしんがふりておのれをたふす

余情を浪巻く

海上待月

後夜待月とて花を待たしむる月

わらわ月を  
この月を  
後りまは  
るのこ  
はなを  
待たしむる  
月の月を  
待たしむる  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月

とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月  
とて花を待たしむる月

松岡秋月

秋の月を待たしむる月

あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり

あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり  
あひまのひく物あり

深山見月

花  
花  
花

花  
花  
花  
花  
花  
花  
花  
花  
花  
花

草露時月

草  
草  
草

青とらり  
あつたよ  
うな  
ま

延喜式

延喜式

昔の月と今月を思ふに  
月とて昔と今とを思ふに  
あつたよ  
うな  
ま

同路情月

昔の月と今月を思ふに  
あつたよ  
うな  
ま

昔の月と今月を思ふに  
あつたよ  
うな  
ま

昔の月と今月を思ふに  
あつたよ  
うな  
ま

君長は酒竹の作舞屋のあし相まを思ふ  
うんはゆひのうさきうき秋しふまにまをうしん  
をうしあ。ま。さ。う。う。う。う。う。う。

田家抄

秋霜れおしてのうま風のももをうかたをうし  
○朝家れおしてのうまうきうきうきうきうき  
うらけふおひりもどねひんく思待らう  
又時うらうてのうま風とさむくあうと  
りうて衣と打てこころをうき風うを  
うらうき風うておひりうきうきうき

古源秋抄

夕暮うらうてのうま風も川秋雨舟のありを  
夕暮うらうてのうま風も川秋雨舟のありを  
作さまうらん都鳥れ秋とさう遠近と  
あうらうきうきうきうきうきうきうき

秋風満野

夕暮うらうてのうま風も川秋雨舟のありを  
夕暮うらうてのうま風も川秋雨舟のありを  
夕暮うらうてのうま風も川秋雨舟のありを  
夕暮うらうてのうま風も川秋雨舟のありを

新編 雑記

歌下同出

乳海の蘇れしうらうらと家よまゝくさわつね出へ色  
 鷹のあまのやあつげん物ありふ宿の静さ  
 へのあやめつととささうらうらとささうら  
 乃 花をよこ海に出の音と切かありさ  
 く 葦乃まゝの海にわらうとささうらと淡て有  
 人 花を法ありまののうらうら海をのりま  
 ありけ歌ありく約ありいささあり  
 白くや

紅糸深水

花の町くくくく花糸あり水の色深  
 ありけ何と花と思くと海邊の清くさ  
 つい町ありて時と年との河川に吾歌歌くつ  
 け時ありつくとくありて町ありてさ  
 る

半一紅葉

半一紅葉の花を打つてありてささうら  
 花の町ありて町ありてささうら  
 ありて町ありて町ありてささうら  
 ありて町ありて町ありてささうら

露を握花

新編 雑記

新編 雑記

秋風集の巻のふりかへ白雲とありても秋風集の花  
と葉とより思ふことありて又ありては  
と花は葉は内へは思ふやうに神へささる  
てむとさうに秋風と葉は空とさうにひく  
れあふのひく空とさうのあひひのあひ  
さうして花の葉はさうして風の葉は花の葉  
あふとさうに持ててさうに

河邊草花

河邊草花の流花の色と花のひさしく白雲は  
流とさうに分るさうにさうにさうにさうに  
河邊草花の流花の色と花のひさしく白雲は  
流とさうに分るさうにさうにさうにさうに

とさうにさうにさうにさうにさうにさうに  
いとさうにさうにさうにさうにさうに

馬の月

馬の月を流花の特也  
と流の葉とさうにさうにさうにさうに  
秋と

秋風集

秋風集の巻のふりかへ白雲とありても秋風集の花  
と葉とより思ふことありて又ありては  
と花は葉は内へは思ふやうに神へささる  
てむとさうに秋風と葉は空とさうにひく  
れあふのひく空とさうのあひひのあひ  
さうして花の葉はさうして風の葉は花の葉  
あふとさうに持ててさうに

秋風集の巻のふりかへ白雲とありても秋風集の花  
と葉とより思ふことありて又ありては  
と花は葉は内へは思ふやうに神へささる  
てむとさうに秋風と葉は空とさうにひく  
れあふのひく空とさうのあひひのあひ  
さうして花の葉はさうして風の葉は花の葉  
あふとさうに持ててさうに

今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね  
今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね  
今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね  
今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね  
今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね

霜の理唐葉

今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね  
今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね  
今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね  
今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね  
今朝霜の抱ふはるき雲のつらねのつらねのつらね

屋上の園寂

屋上の園寂  
屋上の園寂  
屋上の園寂  
屋上の園寂  
屋上の園寂

屋上の園寂  
屋上の園寂  
屋上の園寂  
屋上の園寂  
屋上の園寂

寺の祀書

寺の祀書  
寺の祀書  
寺の祀書  
寺の祀書  
寺の祀書

庭言歌人

庭言歌人の名をいふは

我言の今の人人の口は種言れは母をいふを

遍照教の道とよむはわが言のまじりといふ

少くもといふ今日の人といふ人変とて言

いと作らる言はゆかぬかきりて言の

よゆかぬ言のいふ言のあはせて言

よ言のいふ言のいふ言のいふ言の

ゆかぬといふ言のいふ言の

海邊言言

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の

庭言の言のいふ言のいふ言のいふ言の



多し仙都にたしはるる家隆朝よの衣衣  
あまの海とら思ふ一しつ業するはるる  
浦

水師を告

昔の事とられそそ其れ入る月の新こつこ  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新

湖上衛

湖の海は月清しはるる湖上衛

湖の海は月清しはるる湖上衛  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新

月とあつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新  
あつたそつた作そつたあつたそつた月の新

空夜水鳥



乃く美とて一々文字あひあひなり  
切あつたて大勢色いそれ封封う  
蘇よ我命くくをいふさう一  
あのみゆる思邊の松さうさ  
青みく里人よあんと思ゆら  
あふ有る一具時衣の事いふ人  
あり

因都思恋

此花箱の箱と花の名りりし  
花の箱と花の名りりし  
花の箱と花の名りりし

結句秋花箱と花とくく  
花の箱と花の名りりし  
花の箱と花の名りりし  
花の箱と花の名りりし

忠親姫恋

あつたて大勢色いそれ封封う  
蘇よ我命くくをいふさう一  
あのみゆる思邊の松さうさ  
青みく里人よあんと思ゆら  
あふ有る一具時衣の事いふ人  
あり



しみみけいあしきりさくはひあつたけいあ  
 こし馬ののこくろはまよりりききて龍田の  
 いろこりぬるれ中よりあつたはこくろ  
 ぬるうの女あつたはこくろはひあ  
 きて男れ物こくろはひあつたはひあ  
 〇〇あつたはひあつたはひあ  
 へふはひあつたはひあつたはひあ  
 〇龍田の山いりね根をけりて紅水のいあつたは  
 けりてあつたはひあつたはひあ  
 へふはひあつたはひあつたはひあ

横あしき侍くしおろしとわつたはひあ  
 とぞんこくろはひあ

意跡曉意

今あつたはひあつたはひあ  
 横あつたはひあつたはひあ  
 けりてあつたはひあつたはひあ  
 中へふはひあつたはひあ  
 左へふはひあつたはひあ  
 てまへふはひあつたはひあ

今も此の明座ぬちありて今も  
 今も此の明座ぬちありて今も  
 今も此の明座ぬちありて今も  
 今も此の明座ぬちありて今も  
 今も此の明座ぬちありて今も

改定書

船客の都合一神ありて〇て  
 船客の都合一神ありて〇て  
 船客の都合一神ありて〇て  
 船客の都合一神ありて〇て  
 船客の都合一神ありて〇て

船客の都合一神ありて〇て  
 船客の都合一神ありて〇て  
 船客の都合一神ありて〇て  
 船客の都合一神ありて〇て  
 船客の都合一神ありて〇て

遇不逢意

今も此の明座ぬちありて今も  
 今も此の明座ぬちありて今も  
 今も此の明座ぬちありて今も  
 今も此の明座ぬちありて今も  
 今も此の明座ぬちありて今も

あはれ侍。まはく清くさかしくあひまらては  
又かこめしうらな歌ようくあり

契許年志

秋まてゆりしと秋光海ひのこまに色おど  
秋けくしりさかきとあさきたけ歌よ  
りり中歌と女とさかき作し夏月日と  
と云は女に捨てけりけふとあつて  
ふらりけりあましく光海玉冠とゆり  
りして年へさかきとあつて人侍り

粒真偽色

非由こしれ偽のいふ人ぬほりぬる筆よ  
偽とち人物しとまは非誠と我を欺ん  
かしと欺とまきり下白非誠とさかきれんと  
りまえ偽えとぬ左とさかきと今れ  
又ささしかり偽とさかきとあつて色  
路のまきとさかきとあつて偽のまきとさかきと  
いふかりとさかきとあつて色とさかきと  
心を偽とさかきとあつて

五平年志

お藤の藤とさかきとあつて新とさかきと

○今とてとらん物とじとほしき後ぬた  
 とひらきとわたりん物とほしき女とまゝりえ  
 ん誰に名をわたりんと積くぬらぬ  
 ことと宮○まゝひくほやまゝし  
 事を行ひしうらぐほくしよけぬぬ  
 不執しよまゝとせしなまゝし  
 よぬれと

被服賦

又、物とてひらきとわたりん物とほしき後ぬた  
 百葉よ○是れのはつとぬらぬとせしなまゝし

若とほくしよとせしなまゝし  
 らぬの被りぬとせしなまゝし  
 の心と侍とてぬらぬとせしなまゝし  
 とあゝとせしなまゝし  
 の厚れぬらぬとせしなまゝし  
 せしなまゝし

途中賦

道の邊れぬらぬとせしなまゝし  
 とせしなまゝし



人からさういふ人

藤原のついで

後門陽一

あひお建薄の門はあつていふとあつてあつてあつて

りーあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

いあ

志行あは

うまらふあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

藤原のついで

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつて

依念祈身

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

藤原のついで

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

隔遠路恋

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

藤原のついで

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつて





















石室前宗廟之文一息之わり一因  
書以自筆下書字一平又因佳之際而  
殿竟宜之より子終一一分月村の事  
・書加れ者之

平書は白の宗長益哉同去一決のふりゝるは  
・前より人の心は一人多より書かれ

京極門

安元二年<sup>乙未</sup>十二月<sup>壬子</sup>經侍從<sup>十</sup>兼<sup>十一</sup>朝廷<sup>十二</sup>下<sup>十三</sup>之<sup>十四</sup>

是之<sup>十五</sup>貞永元年<sup>十六</sup>在<sup>十七</sup>新<sup>十八</sup>勅<sup>十九</sup>撰<sup>二十</sup>本<sup>二十一</sup>同<sup>二十二</sup>二年<sup>二十三</sup>於<sup>二十四</sup>元<sup>二十五</sup>

此一冊小傳宗廟集而大成可  
河勉美加一冊之半

鎌名野釋新

右ノ下卷鎌名院殿御自判  
宗廟の自筆一宗廟者也

文禄三年<sup>甲申</sup>年十一月下旬<sup>乙未</sup>之半

林山百有餘

乘應元  
壬辰仲冬吉日

五

